

展させ、平和的に問題を解決すること」を求めている。

4月1日には沖縄県が「地域外交室」を新設、地方として独自のメッセージ発信や平和構築の取り組みを行なう体制を整えた。7月3日から7日までは玉城デニー知事が北京と福建省を訪問、李強首相をはじめとする中国政府要人と意見交換を行ない、中国との友好関係の発展を促進した。

沖縄県はこの動きは注目に値する。他の

地方自治体からもこのようなアクションが起これば、「台湾有事」論を奇貨として軍拡を進める政府の行動にブレイキをかけ、東アジアの平和構築のための大きな力となるだろう。市民一人ひとりの行動が求められている。

2023年11月19日

(いずみかわ・ゆうき／沖縄大学地域研究所特別研究員)

## 「ベトナムの冤魂を記憶せよ」

～ 韓国軍犯罪判決と日本との違い ～

玄 順恵

ソクラテスは「私は知らないということを知っている」と言って死んだが、それは人間にとって最も大切なものは、物事に対して常に「なぜか？」を問い、その意味を吟味し、それに応答していく姿勢をもつことであると訴えたのだった。

今、2023年末、ロシアとウクライナ、イスラエルとハマスとの戦争が泥沼化する様相を見るたび、人間はなぜ戦争を繰り返すのかと自問自答するのは私だけではないだろう。

戦争は「人殺し」を国家が国民に対して

合法的に保障する約束のもとに行なわれる。

しかし戦争はいくら合法的な命令であっても国民・兵士ひとり一人が納得しない限り戦争の継続は困難を極める。戦争には国民・兵士を動員する「意思」と「名分」が必要なのだ。

戦争は、国家と個人、人間の感情の本質を最も深く考えさせる。国家が遂行したい戦争へ国民・兵士を巻き込むため、国家はその「意思」と「名分」を美辞麗句に変えて標語に掲げる。いわく「自由と民主主義」、

「正義の戦争」、「自衛のための戦争」、「大東亜共栄圏」等々。しかし国家の引き起こす戦争は、ひとり一人の国民・兵士が動かなければ成り立たないのだ。

長い人類の歴史から見ると生老病死の運命をもつ人間の一生は、短い。その一生の中で一番幸福な時間や場所は何で、どこであるのかと考えた時、おそらくそれは誰にとっても自分の大切な人たちとともに居心地よく過ごせる時間や空間の数々ではないだろうか。

平和とは、そういった理屈無しの絶対的条件のことを言うのだろうか。

とすれば国民・兵士にとつての最大の「意思」と「名分」は、国家のいうそれとは違う素朴で平和な暮らしでしかないのだ。

戦争においてその最前線に立つのはひとり一人の兵士だ。平和な暮らしから切り離され戦場へ行く兵士は、国家によって駆り出された被害者である。戦場は、殺すか、殺されるかの闘いの場だ。生き残るためには相手側、敵の人間を殺さねばならぬのだから、兵士はおのずと加害者になる。

小田実は、ベトナム反戦運動の中で戦場における人間兵士の存在を考察し「戦争のメカニズム」を解明した。「兵士は被害者であることによって加害者になる」という平和への倫理と論理だ。

被害者であることによって加害者となった兵士に殺される人間の多くは、圧倒的な弱者である子供、老人、女性、病人である。この事実は古今東西のどの戦争においても同じだ。

今年、世界最強の国アメリカを相手に、小さな国ベトナムが長い戦争のなかで勝利を得ることになった「パリ和平協定」締結から50周年になる年だ。

この和平協定をもたらすために一役かったのが、かつてベトナムを1858年から植民地支配し、戦争をし、途中で放り出しアメリカに支配を引き継がせたフランスだ。1968年、時の大統領ドゴールは、フランスの2つの町に北ベトナムと南ベトナム臨時革命政府の代表たちを住まわせる提案をした。

1968年から73年まで、キッシンジャーとL・ドクト間の秘密交渉も含めて総計174回に及ぶ交戦国同士の間で交渉は、ついに和平協定迄に結実するが、この交渉期間は、「テト攻勢」やホーチミンの死、黒人解放運動、エルスバークによる「ペントゴンペーパーズ」の暴露、そしてベトナム反戦運動の世界的拡がりとともに米軍脱走兵が多く、国で続出した大騒乱期でもあった。

そして「ソンミ村」虐殺事件のような

韓国軍による民間人虐殺があちこちで行なわれていた。

韓国のある歴史家は言う。ベトナム戦争ほど世界をゆるがせた戦争はない。多くの小説や映画など多様な文化領域にまで与えた影響は大きい。韓国においてだけ注目されなかった。ベトナム戦線にいた外国軍の中で二番目の大規模派兵であったにもかかわらずだ。戦争中は毎日のように新聞紙上を飾った参戦軍人の勇姿は、戦争が終わると25年もの間、社会的注目を浴びることはなかった、と。

しかし1999年、ハンギョレ新聞社の記者コ・ギョントの企画紙面によりベトナム戦争の歴史と負の記憶がクローズアップされ注目されるようになった。

1993年、ホーチミン大学へ歴史研究のために留学中だったク・スジョンが偶然見つけた資料「ベトナム南部における南朝鮮軍の罪悪」（共産党政治局内部資料）にもとづき現地調査をする中で書き上げた記事が雑誌『ハンギョレ21』に連載され、ベトナム戦時の韓国軍による民間人虐殺の真実が公的に明かされたのだ。彼女には書くまでいくつもの迷いがあった。資料はベトナム側の一方的な報告書であるかも知れない、公平な検証が必要であること、韓国人には、自分たちは外国を侵略し他国に迷

惑をかけたことはないとの「神話」があるため発表による社会的衝撃が計りかねたこと、また日本の嫌韓右翼に利用されかねないという懸念があったため公表を控えていたが、1988年に設立されたNGOナワウリ（私と私たち）のメンバーが、韓国軍のベトナム戦争中の行動を明らかにしようと渡越した際に、この資料をもって彼らとともに現地調査の旅に出たのだ。

「ベトナムの冤魂を記憶せよ」との題名の連載第二回目の記事を略して紹介する。

（\*えんこん…無実の罪によって死んだことを恨む霊魂）

ベトナムの動脈である1号国道をつなぐ主要都市ごとに、ベトナム戦争当時には韓国軍部隊が位置し、……フランス植民地時代に建設したという往復2車線道路は、アメリカが「ベトナムを石器時代に戻してやる」と公言したようにあちこちに傷跡を抱えていた。……非戦闘部隊のテコンドー教官団と医療団を皮切りに、韓国軍はベトナム戦に配置され始めた。65年には青龍部隊（海兵旅団）と猛虎部隊（首都師団）が、66年には猛虎部隊の第26連隊と白馬部隊が戦闘部隊としてベトナムに上陸した。韓国軍が道を整備し、学校や病院を建て、必要な支援、テコン

ドーを普及するなど民間支援事業も戦闘に劣らず尽力したことは事実だが、それが全てだったか……1965年から73年までの9年あまり、青龍、白馬、猛虎部隊など約31万2853人が熱帯の地ベトナムに渡り多くの敵軍を射殺し、およそ5000人の民間人を虐殺した。実際数はその数倍を超えるだろう。今回初の調査地域は報告書に紹介された地域の半分に過ぎない。その過程で向き合わなければならなかった死は、これまで死に対して抱いていた、高尚で厳粛なすべての概念を覆してしまうのに十分であった。彼らは「ベトナム」ではなかったように「烈士」でもなく、彼らの死は感動的でも悲壮でもなかった。そして彼らは死んでも厚遇されなかった。しかしその歳月の間、彼らは黙々と慰霊碑を立て、慰霊祭を行ない犠牲者たちの魂を慰め資料をつつて自分たちの傷を歴史に刻んでいた。

一つ言えることは、虐殺の現場に通い彼らの悲しみを何度もかき回しながらも、私は一度も「復讐の危険」にさらされたことがないことだ。その重苦しい旅路を終えて、私は今、ベトナムの人々が見せてくれた素朴な情けに充ちた微笑が胸の中にこみ上げてくるのを感じる。30年が流れた。今は私たちが彼らと共に鎮

魂の歌を歌うべきではないだろうか。  
ホーチミン市／ク・スジョン通信員  
〔ハンギョレ21〕1999・9・2、第273号

ク・スジョンの連載の反響は大きかった。市民社会は、新たな成熟した市民運動の誕生を歓迎したが、ベトナム戦争元参戦軍人や枯葉剤被害者の元軍人たちは猛烈な反発を示し、ハンギョレ新聞社を襲撃し器物を破壊した。ク・スジョンも様々な嫌がらせや生命の危険にさらされた。しかし市民社会の温かい支持を背景に、コ・ギョンテは「ベトナムキャンペーン」を立ち上げ募金活動に乗り出す。賛同する市民運動が次々と出現し集まった募金は全て虐殺のあった村で行なう慰霊祭や慰霊碑建立に寄付された。虐殺の村々は今でも貧しく、革命烈士でもない彼らには政府からの援助はないという。

NGOのメンバーが現地へ通い村人と共に学校や医療などの建設、整備、診療などに奉仕した。数ある虐殺村での慰霊祭には必ず花輪を送っているが、快く祭場に飾られる村ばかりではない。村の入り口から中に入れてくれないところもあったそうだ。それでも毎年送り続け訪問を重ねている。

現在、ク・スジョンとコ・ギョンテは「韓国ベトナム平和財団」を設立し、理事とし

て活躍している。

彼らは、弁護士の記事と共に2017年「ベトナムタスクフォース」を立ち上げ、韓国政府を相手に訴訟を準備した。原告は、虐殺村のひとつであるクアンナム省のフオンニ村の生存被害者だ。ク・スジョンたちの援助で2020年に提訴に踏み切る。今年の2023年2月の一審判決でソウル中央地裁は、3000万ウォン（約310万円）の支払いを韓国政府に命じた。ベトナム政府は、韓国との経済的国益を優先して被害者の声には吝嗇だ。

フオンニ村虐殺は、1968年に起こった。コ・ギョンテはまだ乳飲み子の頃だ。彼が、「六八年」やフオンニ村にこだわり書き続けるのは「記憶の資格」すら持たされない、そのような人間すべての存在を記憶し刻印したかったからだという。

ク・スジョンは「私は、ただ見て見ぬふりをしたくなかったから書いたのだ」と言っていた。記憶が歴史になる道は果てしなく遠い。しかし何と心温まる道中ではないか。

(ヒョン・スネ／画家)